



インド児童炭鋤労働

地獄の底の坑道で

写真・文

豊田直巳

フォトジャーナリスト

クレーンの降りる縦坑まで、横穴で掘り出した石炭を木製の手押し車で運びだした少年



▶日のノルマは、この手押し車で12杯分の石炭を掘り出すこと。



▶昨年、坑道が地下水脈に突き当たり、坑道にあふれた水で80名余りが命を落とす事故もあったという。



▶地元NGOのインパルスは、ジャインティア高原の炭鉱で働く子どもは約7万人と推定する。

そのまま東に向かえばインパールを抜けてビルマに達する国道44号線。このインド東北部メガラヤ州を東西に貫く幹線道路の両脇に、無造作に山積みされた石炭や錆びついたクレーンが見え始めて、すでに1時間。車はときどき石炭を満載したトラックとすれ違いながら東に進む。炭鉱はまだ続いている。世界最高雨量を記録するこの地、ジャインティア高原には5000とも1万とも言われる炭鉱があるという。

正確な数が不明なのは、どの炭鉱も土地の所有者が、人を雇い入れて自分の地面を掘るといふ小規模炭鉱だからだ。50〜100名の労働者が、一元的に組織されることもなく働いている。

そのアバウトさが、インド憲法、児童労働禁止法から、インドも批准するILO(国際労働機構)の最低年齢条約からも免れて、子どもたちを働かせられる理由でもある。

「ここはセメント工場です」。インド国産タタ製の四輪駆動車、SUMOが国道のアスファルトを離れて泥道に少し入った所で止まった。しかし、セメント工場ではない。炭鉱の入り口だ。メガラヤ州の人権NGO、インパルスのスタッフは「この辺りの炭鉱は正確な名前も住所の登録もありません。大きな工場が目印になっているから、ここをそう呼んでいます」と言った。

炭鉱と言っても、14〜15メートル四方の四角い竖穴が地底に向かって穿たれているだけで、その脇に地下から石炭を引き上げる旧式のクレーンが建っている。真つ暗な坑道に光が見えたとと思ったらヘッドライトを点した真つ黒な顔が這い出てきた。地上から薄つすらと差し込む日の光に浮かび上がったのは、子どもである。人権NGOのスタッフが苦勞するのは、少年の話す言葉が、地元のカシ語やジャインティア語でも、またインド公用語のヒンドゥー語でもないからだ。

彼らは、隣国バングラディッシュやネパールから、半ば売られるようにして、ここに連れて来られているという。14歳という少年は「2日働いて900ルピーもらっています。でもお金は溜まりません。小学校4年生までしか通えなかった学校に戻りたいけど…」と寂しそうに言う。国家公務員の月給が約7000ルピーというから、悪い収入ではないかもしれない。しかし、落下事故で何人も亡くなっている階段やクレーンを使い、通風孔どころか坑木すらない坑道に、ヘルメットも安全靴も作業衣すらもなく、Tシャツ一枚にツルハシ一本を持って潜り込んでの重労働。果たして、これは公正か。

「去年、坑道が崩れて、友人が生き埋めになったよ」と、少年は特別な感情を顔に出すこともなく言った。

とよだ・なおみ 1956年、静岡県生まれ。フォトジャーナリスト。中東、アジアや旧ユーゴ、アフリカなど紛争地の日常生活取材し続ける。著書・写真集に「イラク 爆撃と占領の日々」「子どもたちが生きる世界はいま」「写真集・イラク戦争下の子どもたち」「難民の世紀―漂流する民」「戦争を止めたい―フォトジャーナリストの見る世界」など。



クレーンが壊れた炭鉱では石炭を50メートル運び上げるのも人力。滑落事故が絶えないという。



ネパールから来た13歳の少年が、石炭堀の合間に、ふいごを使ってツルハンを修理していた。